



性の商品化の裏側で

ジャーナリスト
松本 侑壬子

今ではリンダ・ラヴレースという名を知っている人は稀であろう。彼女が主演した映画が公開された一九七二年には私はまだ映画記者ではなかったが、街で大きな看板を遠くから見た覚えがある。それよりもその題名「ディーブ・スロート」という言葉が、当時アメリカの政界を揺るがしたウォーターゲート事件の黒幕（情報源）の意味に転用されたり、後には米軍の最新鋭の地中爆弾のあだ名になったり、と二種の社会現象として盛んに使われていた。

映画そのものは、米国では女優や元大統領夫人ら有名な女性も見に行つたと報道され、ポルノが日陰の存在から一般映画館で上映されるきっかけになったとされる。二年後には「エマニエル夫人」が、日本でも女性が堂々と見に行けるファッショナブル・ポルノとの宣伝に乗せられて爆発的にヒットした。そんな時代だったが、「ディーブ」は、ハードポルノで

ある。喉の奥に性感帯のある女性が主人公と聞けば、ただ事ではない。日本では公開できないカット部分が多く、映画としてはとても一本立て上映はできず、ほかの作品と抱き合わせで間に合わせたという。騒がれたわりに映画のつくりとしてはお粗末なものであったことが伺われる。その主演女優がリンダ・ラヴレースであった。

この作品は、スキヤングラスな映画製作の裏でリンダが体験したポルノという性の商品化の過程を露わに描く。

一九七〇年、フロリダに住む二二歳のリンダ・ポアマン（一九四九—二〇〇二）は、厳格なカトリックの家庭に両親と暮らす、ごく普通の女の子だった。ある日、女友達と遊びに出かけた帰りに、地元のパリの経営者チャックと知り合う。冷たくきつい母親にうんざりしていたリンダは、自由でやさしいチャックにひかれて恋仲になり、すぐに結婚する。うぶな妻

に経験豊かな夫は性の快感を徹底的に教え込む。

やがてチャックは本性を現す。あちこちに借金をつくり、金に困ると、妻のリンダをポルノ映画に出演させて金を稼ごうと思いつく。拒否や抗議には手ひどい暴力の制裁が飛び、リンダは夫の言うままに動く奴隷のようになり、逃げるにも逃げられない屈辱的な日々。セックス漬けの悪夢のような一七日間で衝撃のポルノ大作「ディーブ・スロート（喉の奥）」は完成する。リンダは与えられた芸名の「リンダ・ラヴレース」として自覚のないままに七〇年代の性革命のシンボルとして祭り上げられていく…。

六年後、チャックと別れたリンダはニューヨークにいた。華麗な悪夢のようなすさまじい現実を生き抜いたリンダは、ポルノ界から完全に足を洗って新しい人生を歩み始めたのだ。そして、自分の経験を正直につぶさに伝えるために自伝の出版を決心する。その内容の真偽を証明するために出版社でポリグラフ（うそ発見器）テストさえ受ける。

そんな激動の人生をリンダのサバイバル物語として体当たりで演じ切ったアマンダ・セイフライドが素晴らしい。堅物の母親役にあのシャロン・ストーンというのも配役の妙味だ。

『ラヴレース』

アメリカ映画 (93分)

監督：ロバート・エプスタイン&ジェフリー・フリードマン
出演：アマンダ・セイフライド、ピーター・サースガード、シャロン・ストーンほか

3月1日よりヒューマントラストシネマ有楽町ほか
全国ロードショー

©2012 LOVELACE PRODUCTIONS, INC. ALL RIGHTS RESERVED

